

15章 立命館アジア太平洋大学／

「英語が使える日本人の育成 Student Mobility の推進」

2007年度（平成19年度）現代的教育ニーズ取組支援プログラム

1. はじめに

立命館アジア太平洋大学（APU）の一番大きな目標は、大学の中で学ばせることから、キャンパスの外で実体験をすることである。経験、交流、知識の重層的な獲得を目指しており、国内学生について最低1回は海外経験することが望ましい。期間としては1～2週間、1～2カ月というものもある。また、大学との連携によるダブル・ディグリー・プログラムもある。このような体験的なプログラムの中から、学生に「何かに参加してみましょう」ということを謳っている。半年以上の在籍を伴う留学については、年度ごとに差違はあるが、だいたい年間70名前後である。

大学の理念は国際相互理解であるが、行ったり来たりで終わりではなく、学生の4年間の学習の中にどのようにそれをきちんと入れていくか、それを教室内、教室外、学内、学外でどうやって循環させていくかということが大切である。英語が使えるというのはパーツなところで、もともとの理念は、学生がどのように国内外を自由に行ったり来たりしながら、教室の外で理念と実践をどうやって循環させていくところ、たとえば英語が必要ならこれ、あるいは留学という形になっている。また、こういったプログラムもすべて学生の発達段階で、1年生だったらこれ、次のステップはこれというように発達プログラムを作っている。

2. 2007年度（平成19年度）現代的教育ニーズ取組支援プログラム

－「英語が使える日本人の育成 Student Mobility の推進」－事業の実績について

(1) 言語学習スペースでの海外学習と連携した英語カウンセリングおよび英語学習支援の実施

① スーパー留学コース（SRC）プログラムにおける言語学習スペースの活用

英語学習及び海外学習に強い意欲を見せる学生を学習グループ化し、言語学習スペースにおいて教学部教員や英語教員による、グループでの英語の学習方法指導から、海外留学情報提供、また海外学習とその後のキャリアプランニングを含めた個別カウンセリ

ングを実施した。言語学習のためのツールに限らず、海外学習を計画するに当たって必要となる情報の関連資料を整備し、学生の自主的な学びを補助した。

2007年度は26名がグループとして登録し、入学時はTOEFL-ITP500点以上の学生はゼロだったのが、年度末には11名が500点を越え、480点以上を含めると16名が次年度の交換留学に申請可能なレベルまでスコアを伸ばした。

APUは、外国語学部ではないため、英語力が比較的低い学生が入学する可能性がある。そうした学生の中でも留学したい学生がいるため、その学生たちを支援する形で作ったプログラムである。毎週定期的に来てアドバイジング、夏休みに集中の英語コースに出して、また帰ってきてからアドバイジングをしながらTOEFLのスコアを上げ、留学に積極的に応募させるために作ったものが「スーパー留学コース」である。コース自体は留学することも指している。留学したい学生を選考して受け入れて、鍛えていくことをねらいにしている。人数は一年目が26名、二年目からは20～25名ぐらいである。1年生を対象としている。入学して早期に選考をおこない、その上で候補者を決める。その学生を継続的に指導していき、最終的には留学、留学中も行って面倒を見ていく。留学に行くための基礎的な学力や英語能力等が高い学生が多い大学は、そのようなことをしなくても十分やっていけると思いますが、意欲はあるが英語の力が少し不足している学生などもおり、そのような学生への支援もうまく側面から入れて伸ばしていく。ただ英語力を伸ばすだけではなく、一緒に頑張っていて取り組んでいく中で、対人関係を深めていくこともねらいにある。また海外に対する見聞を深めるといったことも目標に入っている。

最終的には、海外に留学して卒業するので、学習動機というところで英語をやらなければいけない、海外に対する興味を持たなければいけない、そしてAPUにおける学習計画と海外での学習計画をきちんとまとめることが必要になってくるため、学習動機をどのように強化するか、また強い学生に対してはどう維持していくかに力を入れている。1年生のときはかなりぐらつくので、そこをサポートしていく。スーパー留学の期間は1年を目途にしているが、1年では終わらない。要は1年が終わった後でも定期的こちらでケアやアドバイジングをしたり、少人数なので教職員が入って、いろいろな形でアドバイスしたり、いろいろな形でケアをしていくのがこのコースの特徴である。職員の役割は、一緒に指導することである。留学経験がある職員、英語教育に対するバックグラウンドのある職員、自主学習センターというところにきちんとした英語教育に

対してアドバイスができる職員がいるため、アドバイスの仕方などを話し合いながら、教員も職員も一緒になって入っていくのがこのプログラムである。

② 英語学習支援における言語学習スペースの活用

言語学習スペースに大学院生（国際学生）TA を配置、英語学習の個別相談やライティング指導を実施した。英語教員の中から TA のスーパーバイザーを任命し、正課英語科目で言語学習スペースを利用する取組みを行った。1年を通じて延べ8名の TA が言語学習スペースで学生の相談・指導にあたり海外体験へのモチベーション向上、参加促進を促した。

(2) 新規でのプログラム開拓・協議および事例調査、国内外の国際交流会議/研修会への参加

① NAFSA、EAIE 会議、JAFSA などの学外会議/研修会出席

国内外の多数の国際交流担当者が集う会議として、NAFSA 年次総会（米国）、EAIE 年次総会（ノルウェー）、APAIE (=Asia - Pacific Association for International Education / 於：東京)、および国内国際交流担当者が集う会議として JAFSA（国際教育交流協議会）研修会に参加し、本取組みの公表と普及に加えて、海外における国際交流プログラムの事例調査と協議・開拓を行い、本学プログラムの充実を図った。また、JAFSA 研修や国際シンポジウム「エラスムス・ムンドゥスと日欧大学間学術交流のための新戦略」（大阪大学）といった学外会議に参加し、国内他大学の先進事例を学び、本学プログラムの高度化を図った。

② 英語圏における交換留学の開拓

主に NAFSA 年次総会および EAIE 年次総会での協議を通じて、14 カ国・地域の 16 大学と学生交換協定を締結した。また、この他 5 大学と協定署名手続き中である。締結済み大学のうち非英語圏に位置する大学を含む全 16 大学において英語を授業言語とする科目が提供されており、英語力向上にも資する。

(3) Student Mobility Week を通じた学生への海外学習動機付け企画の実施

① 入学時ガイダンスの強化

全新生対象に行われる一連の入学時ガイダンスの一部として、言語と海外学習に特化したガイダンスセッションを導入した。入学直後の時期に、言語学習や海外学習の

意義を明確に伝えることによって、低回生時の言語学習に対する動機付けを行う。ガイダンスの中では、具体的な学習方法の指導に加え、海外経験のある上回生の体験談やプレゼンテーションを見せることで、新入生に身近な成功体験を認識させることができ、学生個人個人の目標設定の補助になった。

② 新入生ワークショップにおける動機づけ講演会

全1回生必修科目「新入生ワークショップ」の一環として、全1回生対象の特別講義を日本語・英語で実施した。今後、多文化環境に適応し、将来国際的に活躍するためには何が必要なかを意識付けすることで、学修意欲の向上を狙った取組みである。英語基準の学生向けにはデューク大学の Dr. Darla K. Deardorff による異文化コミュニケーション、異文化適応についての講演を実施し、日本語基準学生向けには早稲田大学大学院アジア太平洋研究科准教授、アフリカ研究所所長、勝間靖氏による国際協力活動に従事することの意義、将来の目標のために今何をすべきかをテーマにした講演が行われた。

③ 海外学習フェア招聘者とのディスカッション

10月から11月にかけて実施した海外学習フェアの一環として、日米教育委員会より講師を招聘し、海外交換留学を目指す本学学生を対象とした説明会を行った後、スタッフ・ディベロップメントの一環として本学の留学担当職員との懇談の場を設けた。米国留学の動向、とりわけ米国への短期・長期プログラム派遣に関わるビザ取得の最新情報について詳細に説明を受けた。

(4) 低回生海外体験・英語イマージョン（集中訓練）プログラム実施

① FIRST（1回生向け異文化体験プログラム）

FIRST は、主に海外経験が少ない（ない）1回生の国内学生対象の海外体験プログラムで、長期留学やフィールドスタディ等の高階層の海外プログラムへの導入的な意味合いを持っている。2007年度は韓国・香港・台湾で実施し、延べ53名が参加した。実習国・地域出身の上級生がアシスタントとして協力している点も特徴の一つで、事前研修での言語学習や実習中の危機管理などをサポートしている。現地実習はクォーター間の休み期間（5日間）を有効利用し、グループごとに設定したテーマに基づいた調査や現地協力大学の学生との交流などを通して異文化を体験する。現地で得た成果は、帰国後プレゼンテーションで発表している。

② 英語イマージョン（集中訓練）プログラム

英語イマージョンプログラム（英語集中語学訓練）は、学生を4週間から6週間の間、海外の大学へ派遣し、短期集中で言語運用能力の向上を測るプログラムとして設計され、2007年度は、年間で8プログラムを実施した。すべてのプログラムで、正課の英語科目の単位を取得できるようになり（2006年冬より）、学生の学びの幅が大きく広がっている。

2007年夏 シンガポール国立大学、オークランド大学（ニュージーランド）、セントメアリーズ大学（カナダ）、ニューヨーク市立大学（アメリカ）

2008年冬 シンガポール国立大学、ノーステキサス大学（アメリカ）、ウィスコンシン大学（アメリカ）、ミネソタ大学（アメリカ）

2007年度は、8プログラムに合計123名が参加し、2006年度の69名から約2倍近い伸びを見せた。多くの学生に言語学習に関するモチベーションの大幅な伸びがみられ、その後のさらに高次の海外学習への動機付けともなっている。派遣前と派遣後のTOEFLスコアの伸びの平均は24.5点で、単なる海外経験に留まるプログラムではなく、学生は当該プログラム参加によって実質的に英語力が向上している。

（5）海外フィールドスタディ、海外インターンシップ、ボランティア、交換留学等の正課派遣の実施

① 海外フィールドスタディ

フィールドスタディは、教員引率の下、学内での学びを現地実習で検証・発展させ、その後の学修・研究などに還元することを目的とする専門教育科目である。2007年度は国内外で23プログラムを実施し、約300人が参加した。英語開講科目の海外プログラムに参加した日本人学生は60名おり、APUで涵養された英語力を活かし、専門領域の学修を発展させている。プログラム作成にあたっては、大学・教員のネットワークを活用し、韓国の慶熙大学、モンゴルのモンゴル・マネジメント・アカデミー、インドネシアの国家イスラーム大学、国内では愛媛大学、長野県飯田市など複数のパートナーとの連携・協力を得てプログラムを展開している。

② ボランティア

ボランティア研究科目は2007年夏セッション実施分より開始した新規の専門教育科目である。事前・事後研修でボランティアに参加する意義、振り返り学習を行い、レポート、実習中の日誌など総合的に評価をしている。2007年夏セッション期間に19人、2007年冬セッション期間に5人が参加した。（科目登録を希望した学生のみ）

③ 交換留学での正課派遣

2006年（平成18年）度実績（19カ国・地域、37大学へ81名を派遣）と比較すると、平成19年度実績（17カ国・地域、35大学へ45名を派遣）は減少傾向にあるが、2007年（平成19年）度春からの継続的な小規模留学相談会の実施や、TOEFL対策プログラムなどの学内選考出願前支援プログラムの充実により、平成19年度秋季の交換留学出願者数（平成20年度秋季派遣者）は、増加傾向に転じた。

（6）Student Mobility（学生流動化）に関する研究会/補助事業実績報告会の開催

今次補助事業の集大成として「New Horizon for Student Mobility 2008」を、学内外関係者を招へいして開催した（2008年1月22、23日）。①人材育成という観点から急速に国際化する社会のニーズを理解すること、②同じ目的をもつ大学と経験を共有し、国際的な学生の流動性における新しい課題を明確にすること、③会議での議論を通じて、パイロットプロジェクトとなりうる国際的な学生流動性のモデルを設計すること、④これまでの本学の取組みに対する外部評価を受け、今後さらにプログラムを高度化すること、を狙いとして実施している。学内外から約50名の関係者が集い、上記のついで意見交換と討議を行った。なお外部評価は、President of KAIE（Korea Association of International Educators）KIM Choon Hyu氏およびミネソタ大学（Director of International Student and Scholar Services）THOMAS, Kay氏に依頼し、外部評価レポートと諮問を受けた。

*資料作成にあたり、

立命館アジア太平洋大学 教学部 副部長、アジア太平洋学部教授 近藤祐一氏、教学部 アカデミック・アウトリーチ・オフィス 課長 大嶋名生氏へのインタビュー記録（2008年2月12日（木）実施）

【参考ウェブサイト】

2007年度（平成19年度）現代的教育ニーズ取組支援プログラムまとめ

－英語が使える日本人の育成「Student Mobilityの推進」－

<http://www.apu.ac.jp/apuint/modules/sitecontent/content/2007GPreport.doc>